

<実践報告>

教科横断教育研究論に関する実践報告
—教科の横断的な学びによる授業づくりと教材開発をめざして—

小野文子・八木雄一郎・篠崎正典・福田典子・昆万佑子・天谷健一・村松浩幸・小倉光明・
 齊藤忠彦・田島達也・藤田育郎・酒井英樹
 信州大学学術研究院教育学系

**A Report on Cross-Curricular Education Research Theory:
 Designing Lessons and Developing Teaching Materials
 Through Cross-Curricular Learning**

ONO Ayako・YAGI Yuichiro・SHINOZAKI Masanori・FUKUDA Noriko・
 KON Mayuko・TENYA Kenichi・MURAMATSU Hiroyuki・OGURA Mitsuaki・
 SAITO Tadahiko・TAJIMA Tatsuya・FUJITA Ikuro・SAKAI Hideki:
 Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	人文社会系領域，社会科学領域，自然科学領域といった教科を横断した領域を設定して，各領域の教育研究の研究論を横断的に学ぶことで，受講生の課題，関心に基づいた教育研究を実践的に進めることができるようになることを目的とした。
キーワード	教科横断 授業づくり 教材開発
実践の目的	教科横断的に学びによる授業づくりと教材開発。
実践者名	執筆者と同じ
対象者	教職大学院生
実践期間	2020年4月～2022年3月
実践研究の方法と経過	① 「国語科・社会科・家庭科」，「算数科・数学科」・理科・技術科，「音楽科・美術科」，「保健体育科・英語科」をひと組みとし，それぞれがテーマを設定して，集中講義として授業を行なった。 ② 各回終了後に受講生は「振り返りシート」を記入し，最終回の授業では全体の振り返りを行なった。
実践から得られた知見・提言	児童生徒の視点からの教科の横断的な学びに対する理解を深めることができた。また，教科を横断させた授業づくり，教材開発など，他教科の教師間の情報，意見交換の重要性について気づきを得ることができた。

1. はじめに

中央教育審議会の教育課程企画特別部会は、2015年8月に「論点整理」を公表し、新しい学習指導要領が目指す姿を示した。その中で、学習する子どもの視点に立ち、育成すべき資質・能力について、i)「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」, ii)「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」, iii)「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)」という「三つの柱」で明確化することを求めた。また、これら三つの柱で示された資質・能力は、各教科の文脈の中での学びと合わせて、教科横断的な学びにより身につけていく力を相互に関連させて育成させる必要性が示された。

こうした背景のもとに、信州大学大学院大学院教育学研究科高度教育実践専攻では、教科横断的な視点を持つことにより、各教科の視野を柔軟に広げた授業づくりや教材開発ができるようになることをねらいとして、教科横断教育研究論を開講した。本報告では、2020年度と2021年度に実施した授業内容の概要と成果を報告する。

2. ガイダンス

担当者：小野文子・藤田育郎

初回のガイダンスでは、信州大学長野(教育)キャンパスに隣接する善光寺の仁王門(登録有形文化財)内の仁王像の鑑賞を出発点として、以下のように美術科、社会科、国語科を横断する授業内容への発展の可能性について講義を行った(講義担当者：小野文子)。

① 高村光雲(1852-1934)とその弟子米原雲海(1869-1925)による仁王像(1919年)は、地元長野県の本曾の檜が使われている。美術科の鑑賞学習として、仏師であり彫刻家でもあった光雲が制作したこの仏像は、伝統的な技法や仏像としての「型」、西洋の写実的な人体表現を取り入れた造形美などについて学ぶことができる。

② 西洋美術を積極的に取り入れた光雲は、上野恩賜公園に設置されている肖像彫刻、西郷隆盛像(1828-1877)を1897年に制作している(犬は後藤貞行による)。制作の背景や経緯、上野恩賜公園の歴史など、社会科の近代日本史の学習へと広げることができる。

③ 光雲の長男、高村光太郎(1883-1956)による《手》(1918年、東京国立近代美術館所蔵)、光太郎と地元長野県安曇野市出身の荻原碌山(1879-1910)との関わり、日本のロダニズムなど、西洋美術に影響を受けた日本近代の美術史の流れを学ぶことができる。また、「道程」(1914年)や「智恵子抄」(1941年)など、国語科で取り扱われている光太郎の詩人としての活動(言語芸術)へと学びをつなげることで、造形芸術や言語芸術といった様々な芸術表現のあり方について学ぶことができる。

以上のような身近なものを学習素材として例に挙げ、教科を横断させた学びについて考察することを促し、初回の授業へと繋げた。

3. 国語科・社会科・家庭科

2020・2021 年度テーマ：児童生徒が「環境コンピテンシー」を高めるための国語科・社会科・家庭科の教科横断型カリキュラムを構想する

3.1 はじめに

平成 29 年告示の小学校学習指導要領では、子どもたちが現代的な諸課題に対応するために求められる資質・能力を育成するために、教科等横断的な学習を充実することが求められている。現代的な諸課題の中でも、これまでに多くの教科が扱ってきたのが「環境」に関わる学習内容である。特に、社会認識と公民的な資質・能力の育成を目指す社会科と生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を目指す家庭科では、持続可能な社会づくりの観点から「環境」を取り扱っている。

一方で、思考を深める学習活動を展開するためには、資料を読むこと、自分の考えを文章化すること、自分の意見を表現すること、他者の説明を聞くことなどの基本的な言語活動（および国語力）なしにはありえない。しかも、対話や読解の基本能力を十分に育成するためには、児童生徒の生活に密着したテーマや今日の世界情勢や時代性に即したテーマの設定が必要である。つまり国語科の学習指導においても、英語と同様に、言語の形式面の学習にとどまることなく、内容面についての深い理解を促すような授業が求められているのである。SDGs などのグローバルな問題に学習者たちの視線を向けさせる上で、国語科と社会科・家庭科といった内容教科との関連を意識した授業・単元設計を行っていくことが非常に有効であると期待されるのはそのためである。

そこで、2020・2021 年度は国語科・社会科・家庭科を横断的に捉え、『「環境コンピテンシー」(SDGs などの問題に興味関心を抱き行動していく力) を培う授業・単元の構想』をテーマとし、グループで単元開発を行うワークショップを中心とした授業を実施した。各教科の独自性や共通性を踏まえた単元開発を行った上で、それが教科横断的なカリキュラムという観点からどのような特色と意義があるのかについて学ぶ。それにより、SDGs のような総合的・複合的なテーマを扱うための単元開発の可能性について理解を深めることをねらいとした。

3.2 2020・2021 年度 授業概要

授業日：2020 年 6 月 28 日（土）1～3 限，2021 年 6 月 12 日（土）1～3 限

担当者：八木雄一郎（国語科）・篠崎正典（社会科）・福田典子（家庭科）

本授業では、学力観に関わる国際的な動向を踏まえつつ、国語科，社会科，家庭科における「環境」に関わる学習内容の取り扱いについて整理した。

OECD が提起する学力観の中心は「リテラシー（情報処理能力）」から、それも含み込んだ包括的な「コンピテンシー（行動する力）」へと推移してきている。国語科は、いうまでもなく日本語の話す、聞く、書く、読むに関するスキルを向上させるための科目であるが、国語科を通して培われていく語彙力・表現力・読解力・コミュニケーション力などの方法知は、言語文化を継承するために不可欠であるばかりでなく、今日的・将来的な課題への共通認識を持ち、課題解決のための対策を検討するためにも重要である。つまり、「コ

ンピテンシー」の育成において国語科が担う役割はこれまでもこれからも非常に大きい。一方で国語科は言語の形式面の学習に傾斜し、内容面の学習が手薄になるという問題を一種の宿痾として抱えている教科でもある。環境問題のような総合的・複合的なテーマを学校教育の中で扱う際には、内容面（エコやSDGsに関する知識や認識）の学習を促進させながら、それに向き合う国語力を涵養していくという学習デザインを設計していく必要があるだろう。そのためにも国語科は、国語科の学びに閉じこもることなく、他教科に開かれたかたちで展開されていくことが望ましい。

社会科における「環境」の取り扱い、日本の環境教育の動向に即して変化してきた。日本の環境教育は、国際的な動向の中で、「公害学習」「環境・資源学習」「ESD（持続可能な開発のための教育）」へと展開してきた。新学習指導要領では、ESDの視点を踏まえて、「人々の健康や生活環境を支える事業」「自然災害から人々を守る活動」「我が国の国土の自然環境と国民生活との関わり」「グローバル化する世界と日本の役割」の中で「環境」を扱う。そのため、健康な生活環境の維持の上で必要な水の供給、廃棄物や排水処理、森林管理と土砂災害対策、SDGsを含む持続可能な社会の実現のための地球環境への対応などを学ぶ。教師は子どもたちが身の回りのことに関心を高め、環境に配慮した意思決定を行い行動に繋げるために、子どもたちの生活に根ざした指導の在り方を充実させることが重要である。

家庭科における「環境」に関する学習内容は、ヒトとモノに関して関係が深い、特にモノに注目するとその消費活動に関わる。また、教師は商品やサービスを選択する立場としてその意思決定が大きな社会的なうねりへの影響を与えることを自覚する必要がある。さらに使う責任と関わる。従って、運輸や通信を含めて個人の消費行動がいかに自然環境の保全や生産地の生活環境に影響を与えるかについての教育的意義を理解することは重要である。家庭生活において住宅の断熱化や食品ロスの削減や節水、クールビズやウォームビズを含めた節電などは、具体的な行動目標の1つである。

以上の内容を踏まえ、受講者は「環境コンピテンシー」の育成という観点から小学校の国語科、社会科、家庭科を横断した単元開発に取り組んだ。

3.3 まとめ

授業の振り返りでは、受講生より「教科の特性や良さを生かせると実感した」という感想が聞かれた。また「いろいろな教科を学ぶからこそ各教科の学びの特性や良さをもっとよく知ってそれを手だてに全体の学びを深めていける」という感想を得た。さらに「横断的なカリキュラムを考える中で、どう子どもの意識をとらえ、教科を横断的に関わらせていくのかを考えることが難しかった反面、活動ありきではなくむしろそれが大切であることがわかった」という感想も得られた。

4. 「算数科・数学科」・理科・技術科

2020年度・2021年度テーマ：「算数科・数学科」、理科、技術科における統計・情報処理

能力の育成

4.1 2020 年度 授業概要

授業日：2020 年 6 月 13 日：「算数科・数学科」・理科・技術科

担当者：小松孝太郎（算数科・数学科）・天谷健一（理科）・西正明（技術科）

「算数科・数学科」，理科，技術科は一般的に理系教科と言われており，「確率・統計的手法の活用」，「速度の計測」など，互いに関連する現象を扱っている内容も多い．2020 年度は，「統計」と「情報処理」というキーワードで授業を行った．なお，「算数科・数学科」（小松孝太郎）と技術科（西正明）に関しては，担当教員が退職し，概要を執筆できないため，割愛する．

理科では，大沢（2011）の手法を参考に，以下のような問題を与え，結果を予想してもらった．(1) 60 人を 6 人グループ，10 班に分け，グループ内の各人に 1～6 の番号をつける．(2) 各グループで 30 枚のチップを 6 人で分配する．(3) 赤と緑のサイコロをそれぞれ 1 回ずつ振り，赤のサイコロの出目の数と同じ番号の人から緑のサイコロの出目の数と同じ番号の人にチップを渡す．(4) このやり取りを数十回繰り返す．このやり取りは，気体分子がランダムに運動し，お互いに衝突してエネルギーをやり取りしている現象を簡略化したモデルで，たくさんエネルギーを持っている分子の割合や僅かなエネルギーしかもっていない分子の割合を予想していることになるということを説明した．当初の予定では受講者にサイコロを振って実験してもらう予定であったが，新型コロナウイルス感染症対策のため，オンラインでの授業となったため，授業担当者が実際にサイコロを振って説明し，やり取りを数十回繰り返した結果（僅かなチップをもつ人が多数で，たくさんのチップを持つ人はごく僅かしかない）とその科学的な意味について解説した．ほとんどの受講者の予想は，グループ内のメンバーにほぼ均等にチップが分配されるというものであり，授業後の感想も予想外の結果であったというものが大半であった．

4.2 2021 年度 授業概要

授業日：2021 年 10 月 2 日：「算数科・数学科」・理科・技術科

担当者：昆万佑子（算数科・数学科）・天谷健一（理科）・村松浩幸・小倉光明（技術科）

2021 年度も昨年度に引き続き，「統計」と「情報処理」というキーワードで授業を行った．

数学では，統計学とはどのような学問で，どのような場面に使用されるのか，特色や歴史的な経緯を交え，概略の解説を行った．また，『身の回りの統計学』と題して，高校ごとの大学合格者の数のグラフ，お小遣い交渉，紙と電子書籍の推定販売金額のグラフ，予備校の広告，いじめの発生件数のグラフ，相関関係と因果関係の違い等，日常的な場面に即した事例を挙げて問題演習を行った．学校現場や児童生徒の身の回りで統計学が活用できそうな場面を挙げるグループディスカッションを行い，受講者からは，様々な科目や学校生活の場面において，統計学の活用を図る多様な題材が挙げられた．

理科では，2020 年度と同様のサイコロの問題（大沢 2011）を与え，結果を予想しても

らった後にやり取りを数十回繰り返した結果とその科学的な意味について、昨年度よりも詳しく解説した。ほとんどの受講者の予想は、グループ内のメンバーにほぼ均等にチップが分配されるというものであり、ストレートマスター、理数系教科の現職教員、非理数系教科の現職教員による差はみられなかった。

技術では、教育実践研究における量的分析の中でも、簡単であるが様々な応用ができる二項検定（直接確率検定）の基礎的な理論と実践への適用を扱った。二項検定（直接確率検定）の概略を把握できるようにするとともに、例題に取り組んだ。また、計算を簡便にするために、Web ベースの統計ソフトウェアを活用した。その後、技術教育における教材開発やカリキュラム開発の実践を、統計的分析にどのように落とし込み、評価するかについて説明した。実践の様子や論文等を紹介し、客観的な視点で教育実践を評価する大切さを学ぶ様子が伺えた。これら講義と演習を踏まえ、受講生は、学習場面とデータを仮に設定し、そのデータを分析・考察してレポートにする課題に取り組んだ。受講生からは、自身の研究課題に対応したり、担任する学級をイメージしたりと多様な取り組みがあった。

5. 音楽科・美術科

2020 年度テーマ：ジャポニズムを中心に、異文化理解や受容という視点から、文化・芸術について学ぶ

2021 年度テーマ：音楽と美術を通して考える、「表現する」ということ

5.1 はじめに

音響芸術（音楽）と造形芸術（美術）は、一般的には広く芸術として理解されているが、学校教育においては、個別に教科の枠組みが設定されている。しかし、教科で定められている目標等については共通点も多く、例えば平成 29 年告示の学習指導要領では、目標の改善について、生活や社会の中で音楽、美術やその文化と豊かに関わる資質や能力を育成することが示されている。また、両教科での学びのあり方についても、表現と鑑賞を関連させながら教科としての力をつける、という点において共通している。さらに、グローバル化が進む中で、我が国の伝統や文化について学ぶと同時に、異なる文化や歴史についての造詣を深めることで、現代社会における音楽や美術を通じた国際理解に繋げることが求められている。

そこで、2020 年度は 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて欧米に広まったジャポニズムをテーマとし、異文化理解や受容という視点から、東西のさまざまな芸術表現について学ぶことで、現代のグローバル社会における文化の広がりについて理解を深めることをねらいとした。これを受けて、2021 年度は、芸術家だけでなく、個人の内面性の表出として、主体的に表現する、という能動的な行為について考察することをテーマとした。

5.2 2020 年度 授業概要

授業日：2020 年 7 月 18 日（土）2～4 限、担当者：小野文子（美術科）・田島達也（音楽科）

ジャポニスムは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、西洋の美術に与えた日本美術の影響である。そしてその影響は、絵画、彫刻、版画、工芸、建築、服飾、音楽など、広範囲に及んだことが、近年の研究で明らかとなっている。音楽、美術のジャポニスムを一つの授業として取り扱うことのねらいは、東西の異文化交流により新しい表現が生まれたこと、そして芸術のジャンルの枠組みを超えて芸術表現が多様に広がる可能性について学ぶことである。例えば、葛飾北斎による浮世絵《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》からインスピレーションを得たクリストファー・ドレッサーは花瓶を制作し、ドビュッシーは交響曲《海》を作曲した。また、音楽におけるジャポニスムは、日本を舞台にしたオペラやオペレッタが数多くあるが、例えばプッチーニによる歌劇《蝶々夫人》などは、ルーサー・ロングによる『蝶々夫人』（1898）の小説、つまり言語芸術をベースとして生まれたものである。こうした作品において、当時の西欧人が想像した「日本らしさ」を表現するためのエッセンスとして、日本語が歌詞として、日本音楽の旋律がモチーフとして、そして和楽器が臨場感を醸すものとして用いられたりした。言うまでもなく、舞台衣装は日本をイメージしたものであり、服飾の分野である。

以上のような知識は、芸術作品を鑑賞するための背景として役立つと捉えられることが多いが、本授業では、国境や芸術のジャンルを超えた多様な表現への広がりについての学びとして取り扱った。

5.3 2021年度 授業概要

授業日：2021年7月17日（土）2～4限、担当者：小野文子（美術科）・齊藤忠彦（音楽科）

造形芸術は絵具やカンヴァスなどの素材で構成されているが、音響芸術は音階とリズムという抽象的な要素で構成されている。表現の手段は異なるが、美術、音楽作品は自己の内面性の発露である点において共通している。アートという言葉の起源は、ギリシャ語のテクネーであるとされ、西洋における絵画、彫刻作品では、自然を模倣し、再現することが芸術の本質であるとされた。しかし19世紀後半に入ると、作家たちは自己の内面性や主観性を追求するようになり、絵画においては、視覚、聴覚という感覚器を通じた共鳴を、色彩などの抽象的な要素を用いて表現した。つまり、音楽をひとつの源泉として、自己の奥にある感覚を色彩によって抽象的に表現したのである。

音楽による表現は、一般的に「作曲家（演奏家）→作品→聴衆者」というモデルとなり、作品には、作曲家（演奏家）の何らかの思いやメッセージが込められており、それが聴衆者に向けて発信される。情景や風景、文学や絵画、気分などを描写した「標題音楽」では、作曲者の思いや感情をそのまま聴衆者に伝えることができる。一方、「絶対音楽」では、音楽そのものを表現しようとしているので、作曲家の思いや感情を聴衆者に伝えようという目的は存在しない。フランスの音楽学者のジャン＝ジャック・ナティエは、「発信者→作品（痕跡）←受信者」（音楽記号学の三分法）というモデルを示し、痕跡は物理的に中立なものであると説明している。

人類は音楽や美術のジャンルを超えて多様な表現を生み出してきた。そして、ナティエの三分法は、造形芸術にも当てはめることができるだろう。教育の現場では、児童生徒が「発信者」(表現)であり「受信者」(鑑賞)であることを踏まえ、豊かな感性を育むことで、主体的な表現を児童や生徒から引き出すことができる授業づくりが大切となる。

5.4 まとめ

授業の振り返りでは、ジャポニズムについて、作家が日本の良さに惹かれ、日本の造形表現の特徴を取り入れたいという思いを表現したことが、他者の感情を揺さぶる作品となった、という感想が聞かれた。また、2021年度には、表現の連鎖、つまり「発信者」と「受信者」の呼応関係の波及によって、多様な関わりの中から学びが深まる、という感想を得た。芸術が本来もつ自由な表現の可能性について広く学ぶことは、結果として多様な文化や価値を理解し、受け入れることができる、しなやかな感性を育むことにつながると考えている。

6. 保健体育科・英語科

2020年度・2021年度テーマ：体育と英語の教科教育研究 - 「コミュニケーション」に焦点をあてて-

6.1 はじめに

体育と英語の教科横断の視点として「コミュニケーション」に焦点を当てた。体育においては運動技能を習得していくために身体的感覚を言語化していくことが重要である。また、英語においては、母語でない言語を用いながら他者とコミュニケーションしていく力を育成していく。両教科に共通することとして、表現することに制限がある中で工夫しながらコミュニケーションを図っていくことがあると考えた。加えて、子どもたちが言語やスポーツ(運動)という新しい文化と接していくプロセスにおいて表出してくるコミュニケーションには、共通した事柄を見出すことができそうである。「コミュニケーション」は、他教科においても重要であると考え、テーマを設定した。なお、2020年度と2021年度に関して、テーマの変更はしなかった。

6.2 2020年度 授業概要

授業日：2020年10月3日(土)2~4限、担当者：藤田育郎(保健体育科)・酒井英樹(英語科)

2限目の前半(50分)は、酒井が担当し、『言語コミュニケーション』を通じた英語コミュニケーション能力の獲得』というテーマで講義を行った。コミュニケーションとは何か、またコミュニケーションを可能にする能力にはどのような要素があるかを解説し、言語について知っていることと言語を用いることには違いがあることを指摘した。さらにコミュニケーションを通してコミュニケーションする能力の獲得のプロセス(例、意味の交渉)や第二言語習得理論で提案されている言語習得の条件について説明した。2限目の後半(50分)は、藤田が担当し、『運動の課題解決に向けた『認識的なコミュニケーション』

というテーマで講義を行った。現行の学習指導要領において求められる「主体的・対話的で深い学び」の視点から、ボール運動・球技領域を事例として挙げ、ゲームパフォーマンスを高めていくために「わかる」と「できる」を結びつけていくことの大切さ、さらにそこで求められるであろうコミュニケーションの在り方について概説した。

3限目は、関心に基づいて2つのグループに分かれて演習を行った。体育は、「コミュニケーションを活性化させる活動について」というテーマで演習を行った。具体的には、ボール運動・球技領域におけるネット型のゲームを対象として、課題解決に向けた「認識的なコミュニケーション」を生み出すことに貢献し得るゲーム記録の作成をグループワークとして行った。英語に関しては、「言語コミュニケーションを通じた外国語・母語の獲得のプロセスについて」というテーマで演習を行った。具体的には、小グループに分かれて、自らの経験を振り返り、3つの観点（コトバを学ぶという観点、コミュニケーションを通して学ぶという観点、使えることと知っていることという観点）からエピソードをまとめ、分析を行った。そして、その分析を共有した。

4限目は、2つのグループ合同で演習内容の共有と振り返りを行った。

6.3 2021年度 授業概要

授業日：2021年10月16日（土）2～4限、担当者：藤田育郎（保健体育科）・酒井英樹（英語科）

2限目の前半（50分）は、酒井が担当し、『言語コミュニケーション』を通じた英語コミュニケーション能力の獲得」というテーマで講義を行った。講義の内容は、基本的に2020年度の講義の内容と同じであった。2限目の後半（50分）は、藤田が担当し、「運動学習を促進させる『指導言語』によるコミュニケーション」というテーマで講義を行った。児童生徒が体育授業の中で、新しい動きを獲得したり、既習の動きの精度を高めたりしているとする際には、指導者側からの様々なアプローチの仕方が問題となるが、その内の一つである「指導言語」をクローズアップした。「指導言語」とは優れた教授技術の一つとして挙げられるものであり、子どもの感覚に訴えかけたり、運動課題の解決に向けたイメージを膨らませたりする言葉を指す。動きを外部から観察した説明的な言葉での指導だけではなく、子どもの感覚に訴えかける言語的指導の必要性や具体的な事例について概説した。

3限目は、関心に基づいて2つのグループに分かれて演習を行った。体育は、「指導言語を用いた運動技能の習得について」というテーマで演習を行った。受講生のこれまでの指導経験あるいは被指導経験の中から「指導言語」と思われる事例について共有し、分析することをグループワークとして行った。2020年度と同様に、英語に関しては、「言語コミュニケーションを通じた外国語・母語の獲得のプロセスについて」というテーマで演習を行った。具体的には、小グループに分かれて、自らの経験を振り返り、3つの観点（コトバを学ぶという観点、コミュニケーションを通して学ぶという観点、使えることと知っていることという観点）からエピソードをまとめ、分析を行った。そして、その分析を共有した。

4 限目は、2つのグループ合同で演習内容の共有と振り返りを行った。

6.4 まとめ

本授業では「コミュニケーション」をテーマにして、コミュニケーションを通して新たな概念を獲得していくことができることや、身体的感覚の言語化を通して、協働的な学びが可能になったり、児童生徒の感覚に響く指導が可能となったりすることを扱った。学生の振り返りからは、他教科においてもコトバによるやり取りによって新たな概念を獲得していくことに改めて気付いたり、何気ない日常的なコミュニケーションの中でも学びが生じているという自覚を教師が持つことの重要性を感じたり、様々な教科において児童生徒が腑に落ちる指導言語を用いる工夫をしていたりするコメントが見られた。各教科における学びもコミュニケーションの中で生じるという教科横断の視点を再考できたものと考えられる。

7. おわりに

「国語科・社会科・家庭科」、「算数科・数学科」・理科・技術科、「音楽科・美術科」、「保健体育科・英語科」の各回終了後に記載した「振り返りシート」をもとに、最終回では授業全体の振り返りを行なった（担当者：酒井英樹・小野文字）。

振り返りの中では、教科横断的な学びと総合的な学習の時間の違いや差別化についての疑問や教師自身が苦手意識を持つ教科との横断の難しさなどが挙げられた。しかし一方で、「教科」とはあくまでも教育制度で定められた概念的な枠組みであり、子どもたちは日常生活の中で必ずしも教科を基本として物事を見たり、体験したりしているのではないことから、子どもたちの生活の中にあるものを教材や素材として取り入れることが大切である、という振り返りも見られた。本授業では、学校教育の現場の実践的課題に即しながらも、より視野の広い授業づくりや教材開発ができるようになることを目指したが、受講生たちに子どもたちの現実や日常生活といった視点を持つことの必要性についての気づきがあったことは、大きな成果であった。先に引用した「論点整理」で示されたように、学校が子どもたちが「日々の豊かな生活を通して、未来の創造を目指す」学びの場であるために、今後も時代に即した、そして未来を見据えた、多様な視点からの教科横断のあり方を模索する必要があると考える。

文献

文部科学省，2015，教育課程企画特別部会 論点整理，中央教育審議会教育課程企画特別部会

大沢文夫，2011，大沢流 手づくり統計力学，名古屋大学出版会

田中敏，中野博幸，js-STAR，<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>（最終確認 2022/06/18）

（2022年8月24日 受付）